

4 / 14 『キリストの血と信仰による義』（ローマ3：23～26）

長谷川 望牧師

- * 「すべての人は、罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず、」（ローマ3：23）すべての人は罪人である。私は今まで人さまから指さされるような悪いことを一回もしたことがないという方がいたら、嘘になる。それは、聖であり、義である神を知らないか、その神の前に自分のすべてをさらけ出したことがない方であろう。イエスも色々な場面でいかに人間が神から離れているか、罪人であることを示しておられる。（マタイ5章参照）神の前には「義人は一人もない」のである。
- * 「神は義である」。それは、神が絶対的に正しい方であり、その判断やことばや行いに間違いがないという意味である。もし、神が時々間違いを犯す存在だったら、私たちは神を信じることができない。聖書も信頼することができない。義である神が人間の不義を見逃し続けると神の義は証明されないことになるので、2000年前に神は計画を実行された。それが御子イエスの十字架である。
- * 人間の不義をさばき、罰することが必要であったので、「罪の報酬は死です」という言葉のように、人類のすべてを滅ぼすことによって神の義を現わすこともできたが、そうはされなかった。私たちが愛しておられるからである。すべての人の罪を罰することなしに、しかも神の義を立て続ける方法の一つ。私たちの罪の代わりに御子イエスを犠牲にして「なだめの供え物」として自らの怒りを鎮められたのである。
- * 「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、償なしに義と認められるのです。」（3：24）神の愛は、私たちが直接罰することによらず、罪があってもないものと認める、すなわち義と認めるということに現れている。私たち人間は何か良いことをすることや、律法を忠実に守るということによって神のさばきを免れたり、罪の赦しが得られるということはない。「ただ、神の恵みにより」「償無しに」神からの一方的な恵みによって只で与えられるものである。それは「キリスト・イエスによる贖い」があったからである。従って、その贖いが私のためであったと信じることによって、一方的に罪が赦されるのである。
- * 主イエスと一緒に十字架にかかった二人の犯罪人のうち一人は、死の間際にイエスを信じて、悔い改めた。彼はイエスとともにパラダイスにいることを約束された。誰でも、いつでも、信じる者は救われるのである。